

資料涉獵余話

その49

去る二月二十四日、
高森町上市場の中村家
(ご当主まさ子氏)へ
古い『家の光』などの
資料をいただきに参上
した。中村家がかつて
井月が飯伊へ来遊した
折、宿としたお宅で、
井月句が屏風に貼って
あると、今は北原姓と
なった娘さんにお聞き
していたので、そのこ
とを申し上げると、床
の間に出してあります
とのことであった。

お預かりする資料の
仕事が一段落ついてこ

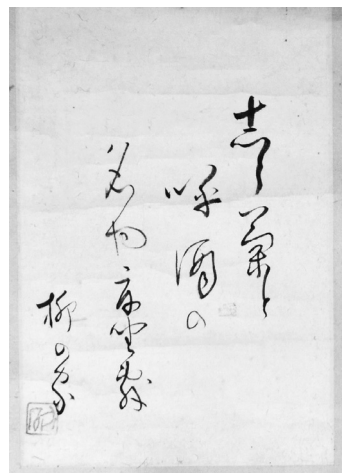
ご当主は藤雄といわれ
不在であったが、人を
見る目の高い方で、乞
食井月の名の通り身に
着けていたものはほろ
呼酒の
名や 夏座敷
柳の家 井月
同然で、体はあかにう
す汚れていたであろう
が、ご主人は奥座敷に
菊という酒が、当地

埋もれていた井月句と手紙

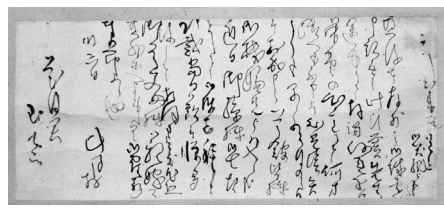
吉澤 健

長年頭に描き続けて
軸仕立てであった。
ささか興奮気味に広げ
拝見すると、まぎれも
ない井月の筆跡であっ
た。軸の中心上部に俳
句を、その下に手紙が
表装されており、俳句
の署名は「柳の家と井
月印、手紙のそれは井
月押」と記されていた。
井月が来訪した時の
であった。

さて、肝心の俳句で
あるが、次の句である。
志ら菊と
呼酒の
名や 夏座敷
柳の家 井月
同然で、体はあかにう
す汚れていたであろう
が、ご主人は奥座敷に
菊という酒が、当地
きの井月が、井戸水で
冷やされた酒を、大ぶ
りな浅い夏の猪口で飲
みながら「おいしい酒
ですね、何という酒で
すか」なるほど白菊で
すか、道理でさらっと
していて、しかもこく
がある…」などと言
ながら俳論やレベルの
高い話に興じ合ってい
る様子が「酒の名や」
からほうふつとされ
る。時に明治十七年六
月のことであった。
この辺については筆
者の手元にある井上井
月顕彰会編『井月全
集』増補改訂版四版
(平成二十一年九月
刊)には次のように記
録されている。



「明治十七年六月）
廿八日（前略）夕刻
市田上市場中村藤雄
先生留守へ投宿。野
州の種屋（此五字難
讀）と同宿す。馳走
冷麦南はん焚佳、酒
上々。此夜雨降千兩。
廿九日 曇天村雨
滞留有。」
とある。
しかし、先記した俳
句はこの『井月全集』



には記載がないので、
今日まで埋もれていた
井月句であろうと思
い、紹介も兼ねてこの
一文を記した。
ところで、俳句の下
にある手紙は、はしめ
の文言の墨がうすく読
めないでいる。二行目
の下部に「御笑納被下
…」とありそうなの
で、表装の都合で初め
が深いので資料涉獵余
話として記した。